
star days

祥鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

star days

【Nコード】

N0402F

【作者名】

祥鈴

【あらすじ】

環境破壊の進んだ地球生まれの女性・ステアが、異世界にやって来たら、どうなるか、という話。ステアが過去を回想しながら語っていく形。

冷たい、寒い、重い、痛い、暗い。

ひりひりと痛む素肌の上を、冷えた水が流れていく。

水を吸って、重くなった髪が、切れ端になった衣服が、体にまとわりついて、気持ち悪い。

動けない。動きたいのに。

目も、開けられない。

こんな所にいたら、私は……。

暖かい。これは、幻覚？

死ぬ間際に見るという、幻想？

私は、まだ、生きている？

話し声が聞こえた。でも、知らない言葉。

意味のわからない言葉は、騒音ノイズと同じ。

目の前が明るくなった。反射で、ぴくりとまぶたが動く。
途端に、体の痛みが、戻ってきた。

ゆっくりと目を開ける。

ランプの光が、目の前に突きつけられている。

『目が、覚めた？』

目の前の人が、何か言った。

どこか、ほっとしたような表情だ。

「私は……」

私が言つと、彼女は首をかしげた。そして、頷いた。

『言葉が通じないのね。翻訳魔法を使うわ』

また、何かを言つた。頭、耳の上あたりを指でつつきながら、何かつぶやいた。

変な人だ。髪も、水色。染めてるのかもしれない。

「大丈夫？ 私の言葉、わかる？」

やっと、わかる言葉になった。私は、頷いた。

どうやら、私は川に倒れていたらしい。

川と言つても、小川というか、大雨の後の水の筋というか、とにかく、小さいものだったみたいだけれど。全身にやけどを負つていたという。それを、彼女が見つつけ、助けてくれたらしい。

どうして、そんなことになったのかはわからない。記憶が、無いから。

ただ、一週間は、眠り続けたいらしい。それだけが事実だ。

「名前は、覚えている？」

私は頷いた。請われれば、物理の公式だつて言える。ただ、ここにいる理由がわからない。

私は、友人と、無人島に住み着いていた。

「ステア。ステア・オルフェウス」

「そう。ステア。私は、アリシア・グランよ。この惑星ほしの名前はわかる？」

私は首をかしげた。そんなの、決まっている。

「地球。最近は逃げてく人が多いけれど、私は、地球で死ぬつもり。知ってる？ 住める星を探しに行つて、ともに生きられるようになる確率を」

気候がおかしくなってから、人々は宇宙に逃げ出した。

愚かな行為だ。宇宙に人間は住む場所を作りつつはあった。でも、実用段階とは言えなかった。十数年前には、突然、宇宙船が丸ごと消えたりした。

所詮、人は生まれた場所でしか、生きられないのに。

そう言えば、父親や、周囲の人には笑われた。

でも、環境を壊したのは、私たちでしょう？

「チキュウ？ 天人みたいな事を言うのね、貴女。この惑星は、グレイト・プラネットというの。これも、天人が勝手に名付けたものだけだ」

彼女、アリシアはふわりと笑った。まるで、子供に教え諭すみたいに。

「そんな天体、宇宙には存在しない」

アリシアは首をかしげた。

「まずまず、天人のようねえ。彼らもそんなことを言っていたそうよ。結局、ここは自分たちの知る宇宙とは、別の宇宙だから、もうチキュウには帰れないって嘆いたんですって。貴女を見ると、それが本当のことにように思えるわ」

私は首を振った。宇宙にすら出ていないのに、“別の”宇宙になんて、来られるわけがない。

「そんなはずがない。私は、宇宙になんて、出ない」

アリシアは、可哀想な子供を見るような目つきで、悲しげに笑った。

「記憶が混乱して、おとぎ話と現実をとらえ損ねているようね。落ち着くまで、ここにいればいいわ。どうせ、一人暮らしたから」
そっと、抱きしめられた。

私は、目覚めてから、はじめて泣いた。

通貨単位をのぞけば、この世界の単位系は地球と同じだった。

言葉は、“翻訳魔法”を使えば、困ることはなかった。

地図は、全くの別物だった。適当に線が引かれ、国境線らしき線があつて、山や海が描かれ、空白には絵が描いてある。歴史の授業で見た、昔の地図のように、精度も悪い。けれど、アリシアはこれでもましな方だと言った。酷いものでは、“神の島”を中心にして、四つの大陸を表す大きな丸を東西南北に並べただけだと。

時代は、地球における、中世あたりだろうか。もともと、世界史は専門外だから、わからない。何千年経っても、革命の起こらない世界。民主主義の考え方すらないらしい。

そして、最大の違いは、魔法が実在し、神がいて、精霊がいることだ。そのくせ、怪物も魔王もない。科学者ではなかったが、それでも私は、科学がすべてだと思っていたので、正直、気味が悪かった。

「あら、でも。ステアには魔力があるわよ。それも、かなり強いわ。属性は、そうねえ、炎かしら。精霊王も呼び出せるかもよ」

アリシアがそんなことを言った時、私はぎよつとした。魔力つて、一体何の冗談なのだろう。そんな、非科学的なもの、あり得ない。

そんなこんなで、三年が過ぎた。

私は、宇宙に出たことがあった。

私の記憶が正しければ、父親に拉致同然に宇宙に連れて行かれ、宇宙遊泳中に、ヒモが切れて、宇宙空間に投げ出されたらしい。

ほら、言わんこつちや無い。

けれども、私は同時に故郷を失った。この惑星は、永遠に中世だ。魔法が蔓延し、科学のかの字もささやかれないここに、宇宙に出る技術があるわけもない。

そして、老化が遅いことに気が付いた。二十歳かそこの娘に、それほど大きな違いがあるか、といわれると疑問だ。でも、明らかに地球での感覚とは違う。

「時間軸が、違うのよ」

遊びに来ていた、アリシアの娘が言った。

「南には、そういう人、結構いるんだから。命宮司はもう、五百年近く生きているらしいの。それに、天人が残したって言う書物にも、時間の流れが違う、ってかいてあった」

アリス、という名前の彼女は、母親譲りの水色の髪をかき上げた。「でも、それが本当なら、ステアさんは南に行くべきよ。今はいいかもしれないけれど、十年もすれば、気味悪がられるわ。どう？ 私と一緒に、行かない？」

差し出された手を、握った。

故郷に戻れないのなら、居場所を作るしかない。

そんな風に思った。

私は、南に旅立つ前日、アリシアを見送った。

アリシアの夫は、高位の貴族だった。

体調が悪くなり、寝込みがちだったアリシアに、家に戻ってきてほしい、と言い、ようやく了承してもらえたようだ。

何があつたのかは知らない。でも、互いを想い合っているのだけは、わかった。

「私は、命宮司のオフィーリア。異国の方を歓迎しましょう」

命宮司、南の最高権力者は、そう言って笑った。

「やっと、私の跡を継いでくれそうな人に出会えた。これで、私も解放される」

私が尋ねると、彼女は寂しそうに笑った。

「私の知り合いは、みんな死んでしまった。精霊王ですら、代替わりした。私も、そろそろ休みたい。普通の時の流れに、戻りたいのです。貴女だって、帰れるものなら、帰りたいでしょう？」

彼女が、南を出る時、見送りに行った。

「どこへ、行くのですか」

「わかりません。祖国は消えました。新たな世界に立ち向かえるほどの若さも、失いました。だから、行き先は決めません。きっと、風が教えてくれるから」

風に舞う金の髪を腕に絡ませ、どこか恍惚をした顔をして、彼女は言った。

「私の属性は風。これが、私です」

私は、黙って手を振った。

気が付けば、千年ほど、過ぎたらしい。

いろいろなものが変わった。元々曖昧だった、魔術と魔法の区別は消え去った。第二共通言語が、東の大陸に広まり、各国の交流が増え、事件も増えた。

親しくなつて、案外野心家だったことが判明したアリスは、グラ نداという国を造った。一時期は大国として栄えたそれも、今では小国の一つだ。

私と一緒に、双子の弟とその婚約者も“降つて”来ていたことがわかったのは、つい最近だ。弟によれば、婚約者は、“革命”に巻き込まれて亡くなったという。

「グランドの王太子、か。久しぶりに私が行こうかな」

私は書類を放り出すと、立ち上がった。

「どこに行くの、ステア」

「墓参りもかねて、グランドに」

そう言いながら、マントを掴んだ。昔はきちんと女装していたが、最近、馬鹿馬鹿しくなつて、男装しかしていない。

きつと、私自身も変わってしまったのだ。一応、良家のお嬢様だったのだから。

「王宮に行くのに、その格好はまずいわ。別に男物でもいいけれど

……適当に選んで、持ってくるから、待っていて」

私は窓の外を見た。どうやら、季節は秋らしい。いい天気だ。

数年後、私は子供を産んだ。なぜだか、双子だった。両方とも女の子だったが、赤毛よりも水色の髪の方が好きだったので、赤毛の方は“呪具”として、彼女らの父親の元へ送ってやった。彼女らが物心ついた頃には、両方から嫌われていた。こっちも、子供はあまり好きではなかったので、好きなようにさせてみた。

青い空は、地球で見たものよりも、澄んでいて美しかった。

私はどうなったのだろう。少しは、変わったのだろうか。

地球の友人はどうしているだろうか。私がいなくなったことについて、心配などせず、忘れていてくれればいい。でも、強い人だったから、きっと私がいなくても、大丈夫だろう。

強い風が吹いて、前の命宮司を思い出す。

私は、風と共に生きたいとは思わない。いや、生きられない。帰る場所がないと、私はきつと、生きてはいけない。

支えてくれる人がいて、笑いあえる人がいる環境は、居心地がよすぎて。

外に出ることすら考えられない。

どうせ、いつか終わりが来るのなら、最後までここにいたい。

きつと、私は変われなかったのだ。根本的なところで、
けれど、変わる必要もない。

「やっぱり、黒い髪、ステアには似合ってるわ」

グレイシアが、ふわふわした金髪をなびかせて言った。

「私は、こっちの方が好きだよ」

グレイシアの髪を一筋すくって、口づける。

「ステアには、って言ったでしょう？ 私には、この髪が一番似合っているもの」

自信たっぷりと言う姿がおかしくて、思わず笑ってしまう。

そして、鳥が一羽、飛び立った。

どこか、目指すべき場所があるのだろうか。

（後書き）

特にオチも何もありません。自分でもなんだかよくわかりません。設定を出さなかった分、意味不明になってしまったような気がします。これをジャンル分けすると、何になるんでしょうか。

時間のずれは、こちらの一年が、あちらの百年になるくらいを想定しています。

駄文、失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0402f/>

star days

2010年10月8日15時56分発行